HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イスラエル宗教連合（続）：ヤハウエ礼拝の発展
Author(s)	宇野, 光雄
Citation	北海道大學文學部紀要, 10, 65-85
Issue Date	1961-11-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33265
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_P65-85.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

イスラエル宗教連合（続）

――ヤハウェ禮拜の発展――

宇野光雄

イスラエル宗教連合（続）

—ヤハウェ礼拝の発展—

宇野光雄

一

イスラエルは、一二部族の連合神ヤハウェに対する礼拝を中心とする純粋な宗教連合として、パレスティナにおいてはじめて成立した。[一]

しかし、このことは、この連合が、その当初から完全な宗教的統一を実現したことを意味するものでなかつた。むしろ事態は逆に連合神の受容によつて、一層錯綜したものとなつたと言える。[二]何故なら、あとでふれるように、第一に、連合の構成要素である各部族内で、既に、ヤハウェを連合神として受容する以前から、固有の神礼拝（氏族神、部族神礼拝）が行われており、成員は、その伝統的礼拝義務によつて拘束されていた。(cf. Jos. 24:2, 14, 1 Sam. 20:6) 従つて連合神の受容は、差当り、この連合内で礼拝秩序の異なるヤハウェ礼拝と部族（氏族）固有の神礼拝との並存を結果することとなつたからである。更に、第二には、本来半遊牧的小家畜飼育層に属し、単純素朴な文化の所有者であつたイスラエル諸部族のパレスティナにおける農耕定住生活への移行は、必然的に、当地の先住民であり、既に高度の文化を所有していたカナン人[三]との接触混交を生じ、ために、カナン人の間で広く崇拝されていた沃地の神、バール礼拝等が、イスラエル人の間でも行われることになつたからである。(cf. Judg. 3:6,7, 6:25, 10:6 f. etc.) 連合神ヤハウェは、一口に言つて、沙漠の神であり、決して農耕文化地帯の神でなかつた。

以上のように、連合神ヤハウェの受容は、この連合内において、差当り礼拝内容、及びその性格を異にする民族神、部族（氏族）神、沃地農耕地帯の神等の礼拝の並存を結果することになり、従つて、連合神ヤハウェに対する礼拝団体として、はじめて統一ある共同体を形成したこの連合も、その当初から決して完全な宗教的統一を実現したわけではなかつたのである。連合神ヤハウェ礼拝は、第一に、パレスティナ定住以前から各部族内で行われていた伝統的な神礼拝と、第二に、パレスティナ定住後次第に行われるようになつた沃地の農耕神礼拝と対決せねばならなかつた。

それでは、こうした事情のもとで連合神ヤハウェ礼拝は、どのように推移し、またどのような方向に発展して行つたであろうか。以下行論をおつて考察して行きたい。[四]

（一）拙稿、イスラエル宗教連合、北海道大学文学部紀要8、参照。
（二）G. V. Rad, Theologie des Alten Testaments, Band I, 1957, S. 28.
（三）シリア・パレスティナの地方は、古代オリエントの二大文明地帯であるメソポタミア平原とナイル川流域とを結ぶ地中海岸ぞいの一小地域を占めており、両文化中心地帯の陸橋としての役割を果すべき所に位置していた。従つて、両文化地帯相互の経済的文化的交流は、この地を通つて行なわれた。この地方では、紀元前三〇〇〇年頃、既に、Jerusalem, Ai, Jericho, Geser, Megiddo, Beth-Shan, Beth-Yerah, Byblos, Hamath 等の都市が存在していたことが知られている。尚、カナン Kena'an という名称は、シリア、パレスティナの原住民が、己が地域を呼んだ名で、創世紀十章によれば、カナン人は、イスラエル以前の南ガザから北アルワデ、ハマテ迄の住民を含んでいた。(Gen. 10:15-19) 従つて、カナン人という呼び名は、決して単一種族を指しているのでなく、多くの種族の総称である。ちなみに、パレスティナは、原始キリスト教文献において、当時の聖書の歴史的舞台を記す名称である。この地方は数次に

及ぶユダヤ人の叛乱の結果、それ迄つかわれていた Judaea という名を避けなければならなくなり、当時の人々が、実質的に「イスラエルの土地」を包括したローマの属州を名づけるために Palaestina (Philister Land) という名を、つかうことになった。これが今日迄使用されているのである。従つて、この名は、当然聖書にはでてこない。 cf. The Westminster Historical Atlas to the Bible, P. 33. M. Noth, Geschichte Israels, 1954, SS. 131, 15f.

（四）我々は、ヤハウェ礼拝が、最初から確乎とした、独自な礼拝内容をもち、部族神、バール礼拝との角逐を通して、こうした独自性をカナンの文化地帯で貫徹したと考えることはできない。何故なら、連合成立時におけるヤハウェ礼拝の内容は単純素朴な原始的段階にあつたと考えるからである。イスラエル諸部族が、ヤハウエを連合神として受容する際に、この神との間に締結された契約の内容は、M・ウェーバーの推論のように単純な儀礼（偶像なき礼拝・割礼・くじによる託宣）並びに社会的兄弟関係の秩序、戦争予言の権威、戦利品のタブー等に過ぎなかつたであろう。我々は、むしろ、こうしたまだ内容の固定していない、素朴なヤハウェ礼拝の諸観念、儀礼等が、異宗教と接触することによつて、はじめて、これら異宗教と異なる己が性格を意識し、時代の経過と共に、次第に独自な性格を創造し、その内容を発展させていつたと考える。小論は、こうした点を宗教史学的観点から探求して行こうとしたものである。 cf. M. Weber, Das Antike Judentum, S. 135f.

二

各部族が、ヤハウェ礼拝と異なる己が固有の神礼拝をもつていたことは、ヨシュア記二四章の、シケムで開催された連合会議の記事(V.1-28)[一]からも明らかである。即ち、この記事において、ヨシュアは、各部族から集つた代表者たちに対し、先祖の神々を捨てて、ヤハウェのみを崇拝するか、どうか、その決断を促している。この先祖の神々が、カナンの地の神々でなく、古くから各部族に伝承されていた部族（氏族）の神を指していることは間違いない。[二]しかも、我々は、この記事において、決断を迫るヨシュアの激しい口調から、当時において、各部族内で広く部族（氏族）神礼拝が行われていたことを知るのである。

また我々は、サムエル記上・二十章六節の記事から、部族（氏族）の神礼拝が、宗教連合の時代を通して尚存続していたことを推測する。即ち、ここでは、サウル王から逃れるために、ダビデが、己が氏族で行われる「全家の年祭」に出席することを口実にしているのであるが、この「全家の年祭」が、ヤハウェの礼拝秩序に属さないものであることは、前後の事情から言つて明らかである。[三]

このように、連合成立後も尚、部族（氏族）神礼拝が行われていたということは、この宗教連合の成立時の事情から見て、特に怪しむに足りない。即ち、イスラエル連合を構成するに至つた各要素（部族、氏族）のカナンの地への侵入は、歴史的には、旧約の歴史伝承の語るところと異なり、同時にではなく、時代を異にして、幾層にも波をなして行われ、また彼等の半遊牧的生活から農耕定住生活、更に、都市定住生活への移行も複雑な経過を辿り、定住するに至つた地域によつて、その生活様式を異にした。[四]しかも、ヤハウェを連合神として受容する重要な契機となつたエジプト脱出時の事件を体験し、連合成立の中核を構成するに至つたものは、後期にこの地へ侵入して来たものであつた。ヤハウェ礼拝は、この時はじめて、パレスティナにもたらされたと考えられる。[五]この神は、旧約文献から（EX. 6:2f.）明らかなように、本来イスラエル人にとつて、見知らぬ神に外ならなかつた。[六]従つて、連合の構成要素となつた各部族は、既に、ヤハウェと異なる己が神、及びその礼拝秩序をもつており、[七]また、カナンの地への侵入に対しても、夫々、独自の伝承をもつていたと考えられる。

更に、連合成立後も、これらの諸部族は、各々相互に、地域的に閉鎖的な、独立した生活を営み、その行動も自主的に行われ、連合の存立維持に重大な影響のない限り、[八]連合の名において拘束されることがなかつた。何故なら、この連合は、政治的統一体でなく、純粋な宗教

連合であり、各構成要素を強制するような政治的、軍事的統一機構、また、連合の名において裁判を施行する法廷ももたなかつたからである。(九) 勿論、連合全体にとつて、ヤハウェ礼拝及びその聖所を守ることは、重要なことであり、あとでふれるように、各部族が、中心聖所で規則的に行われた連合会議 (cf. ISam. 1 : 3) に出席し、礼拝を行つたことは、間違いないと思われる。また、そこで、ヤハウェの祭司が、恐らく純粋な伝承を守つていたことも同様疑うことは出来ない。しかし、こうした連合会議に出席する時を除いて、各部族内では、己が地域内で、古くから崇拝されて来た部族 (氏族) 神礼拝を行つていたと考えられる。部族の成員の日常生活にとつて、すくなくとも、連合の初期において、ヤハウェ礼拝より、己が部族内において古くから崇拝されて来た部族 (氏族) 神礼拝の方が、より重要な意味をもつていたと思われるのである。

(一) 上掲、イスラエル宗教連合、二八頁以下参照。
(二) Cf. W. F. Albright, From the Stone Age to Christianity, 1957, p. 243.
(三) Cf. M. Weber, Das Antike Judentum, SS. 149ff.
(四) 上掲、イスラエル宗教連合、二六、二八、三二頁註 (四) 参照。
(五) イスラエル人が、ヤハウェを連合神として受容するに至つた契機は、エジプト脱出に際して、この神から受けた偉大な救済行為によること、ヤハウェという神名が、この時はじめてイスラエルに伝えられたことは、旧約の歴史伝承の明瞭に語るところである。エジプト滞在及び、その脱出は紀元前一三世紀頃と考えられるから——この頃すでに、レア諸部族は、パレスティナに定着していた——ヤハウェ礼拝をパレスティナにもたらしたものは、比較的後期に侵入したものといえる。cf. M. Noth, op. Cit., SS. 114, 78f. 113Anm. 1.
(六) 上掲、イスラエル宗教連合、四一頁註 (三) 参照。
(七) ヨシュア記一—十二章迄の伝承について、M・ノートは、次のような見解を下している。即ち、この伝承は、イスラエル全体の出来事を取扱つたものでなく、特に、エフライムの伝承と見なされる個所 (Jos. 10:1f.) ガリレアの伝承 (Ch. 11:1f.) を除けば、ベニヤミンの出来事に関する叙述である。他の諸部族も恐らく己が固有の土地占居の伝承を夫々もつていたであろう。こうした諸部族の伝承は、旧約聖書の編纂において、イスラエル全体の文化地帯の征服という共通の観点から排除されたのであろう、と。Ibid., SS. 72f.
(八) 一例をあげれば、士師記一九章—二十章におけるレビ人に対するベニヤミン人による客人法の違反。前掲、イスラエル宗教連合、三七頁参照。
(九) 上掲、イスラエル宗教連合、三五、三七頁参照。

さて、以上のように、イスラエル連合内で尚根強く、部族 (氏族) 固有の神礼拝が行われていたとするならば、この部族 (氏族) 神礼拝とは、本来いかなるものであつたであろうか。

こうした問に対して、我々は、今日の旧約文献から、直接明瞭な解答を得ることは出来ない。何故なら、今日の旧約諸伝承は、後代の編纂にかゝわるものであり、ヤハウェ礼拝に基づくイスラエルの統一、イスラエル全体のカナンの土地取得という明瞭な意図のもとに、既存の断片的諸資料に、修正、補充等を加えて、しかも、長期に亘る何回かの編纂を繰返して出来たものである。(一) 従つて、部族神礼拝の内容等について全然ふれておらず、僅かにその痕跡をあとづけ得るに過ぎないからである。

このような今日の旧約伝承のあり方から見る時、我々は、もはや個々の部族 (氏族) 神の内容等を個々の点に亘つて知ることは出来ないわけであるが、今、こうした痕跡を創世記の族長伝承から取りあげ、部族 (氏族) 神礼拝が、本来いかなるものであつたかを検討して行きたい。

今日の「モーセ六書」の構造において、族長伝承の占める位置は、一、イスラエルの歴史と信仰が、族長アブラハムと共にはじまつたこと。二、カナンの諸聖所において族長に顕現した神はイスラエルの神に外ならないこと。従つて、これらの諸聖所は、本来イスラエル人のものであること。(cf. Gen. 12:6, 35:2, 4, 12:8, 13:3, 28:11-22, 35:1, 3, 5, 7, 21:22ff., 26:23ff, 46:1-4, 13:18, 18:1ff.) 三、イス

ラエル諸部族のカナンの文化地帯の土地取得と、その地での繁栄は、既に、神が族長アブラハム・イサク・ヤコブに対してなした約束（Gen. 12:1-3, 15:5, 13-16, 18:18f., 15:7-12, 17-21, 26:2-4, 28:13-15, 35:11f. etc.）の成就に外ならないこと等を主張することにあつたと考えられる。即ち、族長伝承は、イスラエル諸部族の、神ヤハウェの導きによるカナンの土地取得と、この地での繁栄の前史として、明瞭な位置を占めているということが出来る。この伝承の編纂者達（J・E・P）によつて、族長に顕現した種々なる名称で呼ばれている神—'El Shaddayi (Gen. 17:1, 43:14, etc.) 'El 'Elyon (Gen. 14:18-24) 'El 'Olam (Gen. 21:33) 'El Ro'i (Gen. 16:13) 'El Beth'el (Gen. 31:13, 35:7) —は、イスラエルの神、ヤハウェに外ならなかつたのである。

しかし、既述のように、連合神ヤハウェは後期にこの地に侵入して来た要素がもたらしたものであつた。従つて、若し、族長伝承がその背後に何程か歴史的事実を秘めているとするならば、これらの神々は、ヤハウェと異なるものと言わなければならない。

さて、それでは、族長伝承にあらわれてくる神々の名称は、我々に一体何を告げているであろうか。

我々は、族長伝承において、族長に顕現し、族長に崇拝された神々を、その名称に従つて、大きく二つの型に分類することが出来る。即ち、

一、'El (Shaddayi, 'Elyon, 'Olam, Ro'i) の名称で呼ばれている型。

二、'elôhê 'abrāhām「アブラハムの神」、'elôhê yishaq「イサクの神」(Gen. 28:13, 31:42, 32:10)、並びに、Pahad Yishaq「イサクのかしこむもの」[一一] (Gen. 31:42, 53)、'abîr Ya'qob「ヤコブの全能者」(Gen. 49:24) 等のように、族長の名前と密接に結びつけられて呼ばれている型である。

一、の 'El から検討して行こう。

'El という神名が、イスラエル人の間で、特にその初期において[一二]、一般に使用されていたことは、イスラエル人の人名のうちこの名を含んでいる者が多いことからも推測できる。例えば、Yishma'-'el…May 'El (God) hear, 'Eli-'abh … My God is father to me, 'Ami-'el… (The God of) my kindred is God (to me) 等である。[一三] Ya'qobh, Yishaq も、Ya'qobh-'el…May 'El protect, Yishaq-'el…May 'El smile (favorably upon me in my distress)[一四] の短縮形と考えられる。またこのような神名ェルと結びついた人名が、ひとりイスラエル人に限らず、西アジアのセム族の間でも行われていたことは、マリ文書[一五]（前十八世紀頃）の中に出てくる人名、例えば、Ikrub-el, Jakrub-el, 等からも推測出来る。

更に、こうした 'El は、人名のみでなく、カナンの古き地名にも出てくる。例えば、Yabne-'el…Let 'El build (Jos. 15:11), Yiphtach-'el…Let 'El open(Jos. 19:14, 27), Yizre'-'el…Let 'El sow (Jos. 15:56), Migdal-'el…The tower of 'El (Jos. 19:38), Beth-'el… The abode, or sanctuary (Gen. 28:18, 19), Penu-'el…The face of 'El (Gen. 32:31) 等々である。これらの地名は、いずれも、イスラエル諸部族の侵入以前から存在した古きカナンの地名であつた。[一六]

以上の考察から、我々は、'El は、イスラエル連合成立、恐らく、カナン侵入以前からイスラエル人の間で、更に、イスラエル人に限らず、古代セム族[一七]の間で、神の名称として使用されていたのではないかと考える。従つて、今日の伝承において、ヤハウェに外ならないとされている、種々なる名で呼ばれている神・'El は、本来、ヤハウェと全く異なる神を指していたと言わなければならないであろう。

さて、それでは、族長伝承における前述の 'El shaddayi「全能な

神」'El 'olam「永遠の神」'El 'Elyon「いと高き神」等は、イスラエル人にとつて、いかなる神であつたであろうか。

カナン人（フェニキヤ人）の間で崇拝された万神殿（Pantheon）において、最高神は、父・'El と呼ばれたことが、ラス・シャムラ文書（ca. 1400 B.C.）から明らかとなつた。(九) W・F・オールブライトは、'El 'Elyon, 'El shaddayi と呼ばれた神は、ラス・シャムラ文書の、父・エルと全く同じく、最高神としてイスラエル人によつて崇拝されたとし、(一〇) 更に、父（'El）、母（Elat または Anat）子（Shaddayi-Mountain One）の三神よりなる Pantheon が、イスラエル人の初期の民間宗教にあつたのではないかと考えている。(一一) 確かに、伝承にあらわれてくる「全能な神」「永遠の神」「天地の所有者 qōnēh shāmayim wā'āreṣ であるいと高き神（Gen. 14:19, 22）」等の称号は、この神が、イスラエル人によつて、最高の地位と権威をもつ神として崇拝されたことを推測せしめる。しかし、今日の旧約伝承では、エルは、もはや、特定の神を指す固有名詞としてでなく、一般に、神を意味する言葉として使われているように思われる。(一二) しかも、エルは、カナンの古き地方的諸聖所と密接に結びついており、(一三) 相互に関連をもたない個々の物語のうちに出てくるに過ぎない。従つて、我々は、エル神崇拝の具体的な内容、更には、エル礼拝が、かくるものとして、イスラエル諸部族内で行われたか、どうか等について何等知ることが出来ないのである。

(一) Cf. C. A. Simpson. The Early Traditions of Israel, MCMXLVIII, pp. 19ff. H. W. Robinson, The old Testament, ITS Making and Meaning, 1949, p. 210. M. Noth, op. cit., S. 106.

(二) Paḥad は邦訳で「かしこむ者」と訳されている。これは、英訳の The Fear にあたる。しかし、最近の学説では、Paḥad は Kinsman の意とされている。cf. W. F. Albright, op. cit, p. 248. J. Bright, A History of Israel, 1960, p. 89.

(三) Cf. W. F. Albright, op. cit., pp. 244 f.

(四)(五) Cf. ibid., p. 245.

(六) Cf. M. Noth, Mari und Israel, (Geschichte und Altes Testament, Herausgegeben von G. Ebeling, 1953) S. 134.
この論文において、M・ノートは、マリ文書の人名を分析することから、el/il が神を意味するものであり、両河地方の西セム族の間で、一般に使われていたことを論証している。(S. 136) 更に、族長、アブラム、イサク、ヤコブ、（イスラエル）が、同様に西セム族の典型的な名前であつたことを明らかにしている。(SS. 142 ff. 146) cf. Westminster Historical Atlas to the Bible, P. 25.
Cf. W. O. E. Oesterley and T. H. Robinson, Hebrew Religion, 1955, P. 53. A. Lods, Israel, Translated by S. H. Hooke, 1953, P. 124, N. 11.

(七) カナン人は、創世記一〇・六では、ハム族（クシ・ミツライム・プテ）に属するとされている。しかし、カナン人は、人種的にはセム族である。cf. Westminster Historical Atlas to the Bible, P. 26.

(八) Cf. J. Finegan, Light from the Ancient Past, 1951, PP. 146 ff. J. B. Pritchard, Archaeology and the Old Testament, 1958, PP. 106 ff.

(九) Cf. W. F. Albright, op. cit, P. 231.

(一〇) Cf. M. Weber, op. cit, S. 163, Anm. 3.

(一一) Cf. W. F. Albright, op. cit, P. 247.

(一二) 例えば、'El 'olam は、ベエルシバの聖所（Gen. 21:33）'El 'Elyon は、エルサレムの聖所（Gen. 14:17-21）'El Roi は、カデシとベテルの間にある聖井（Gen. 16:13-14）'El Beth'el は、ベテルの聖所（Gen. 31:13, 35:7）cf. W. O. E. Oesterley and T. H. Robinson, op. cit., P. 54. 創世記十四・十八以下の記事でアブラハムが所有物の十分の一を納めたサレムの王メルキゼデクは、いと高き神の祭司と述べられている。エルサレムの聖所の神は、当時こうした称号で崇拝されていたのであろう。我々はここから、一般にカナンの在来の聖所の神もこうした称号で呼ばれていたと考える。

さて、それでは第二の神名の型である、「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」「イサクのかしこむ者」「ヤコブの全能者」のように、族長の名と密接に結びついてあらわれる神はどうであろうか。

今日の族長伝承においては、既に述べたように、こうした神も勿論、ヤハウェに外ならなかつた。しかし、我々は、こうした神が、本

来、ヤハウェと異なる神であつたことを、修正、挿入を加えて改纂された今日の伝承からもうかがい知ることが出来る。創世記三一章のヤコブとラバンの物語において、二人が平和裡に和解し、相互に誓約を交した時、ラバンは、次のように言つている。「どうかアブラハムの神、ナホルの神、彼等の父の神がわれわれの間をさばかれるように」(V. 53a) と。(J)[二] この個所は、ギリシア語七〇人訳では、次のようになつている。*ὁ θεὸς Αβρααμ καὶ ὁ θεὸς Ναχωρ κρινεῖ ἀνα μέσον ἡμῶν* 即ち、複数の主語を単数の述語 *κρινεῖ* で受けている。また、マソラテキストでは、'elôhê 'abrāhām wē'lôhê nāhôr yishpeṭû bhênênû 'elôhê 'abhîhem 即ち、複数の主語を複数の述語 yishpeṭû で受けている代りに、'elôhê 'abîhem「彼等の父の神」を加えている。更に、サマリア五書では、'elôhê 'abrāhām wē'lôhê nāhôr yishpōṭ bênênû 'elôhê 'abrāhām 即ち、複数の主語を単数の述語 yishpōṭ で受け、更に、'elôhê 'abrāhām「アブラハムの神」を加えている。[一一] これらは、いずれも不自然な文体である。[一二] 今これらの文体を比較する時、我々は明瞭に聖書記者の意図を知ることが出来る。即ち、ギリシア語訳で単数形の述語 *κρινεῖ* を使用しているのは、親族関係にあるヤコブとラバンの父の神が、同一の神であることを、マソラテキストの「彼等の父の神」は、両者の神の同格であることを、更にサマリア五書では、両者の神が、同一の神、即ちアブラハムの神であつたことを示すことによつて、読者に、両者の神が結局ヤハウェに外ならないことを理解させようとしたことを知る。[四]

恐らく、「彼等の父の神」を取除いたマソラテキストの本文「どうかアブラハムの神、ナホルの神がわれわれの間をさばかれるように」が、原史料により近いものであろう。従つて、上述の、単数形の述語、附加語（彼等の父の神、アブラハムの神）は、ヤコブの父祖の神、ラバンの父祖の神を、ヤハウェと同一の神としようとする明白な意図のもとに、修正され、補充されたものと言うことが出来るであろう。

我々は、以上のような考察から、この伝承*の背後に、古代の契約締結行為を反映しているより古い原史料の存在したことを推測する。即ち、ヤコブとラバンの誓約は、ヤコブもラバンも、古代の慣習に従つて、各々自己の父祖の名で崇拝されていた神を契約の保証者として立て、それを指して誓つたことを示していると考えられる。このことは、E史料が、ヤコブは「父イサクのかしこむ者によつて誓つた」(V. 53b) と述べていることから更に明瞭に読み取れるように思われる。ここから、我々は、一、ヤコブもラバンも、各々父祖の名と結びついた神を礼拝対象としてもつていたこと、二、両者の契約は、「わたしの一族とあなたの一族」(V. 37) が示すように個人間の契約ではなく、両人に属する、または、その指導下にある集団（家・氏族・部族）を共に拘束するものであつたこと、三、こうした神々は、単に契約の保証者にとゞまらず、「わたしの父の神はわたしと共におられる」(V. 5)「わたしの父の神、アブラハムの神、イサクのかしこむ者がわたしと共におられなかつたならあなたはきつとわたしをから手で去らせたでしよう」(V. 42) からうかがえるように、本来こうした集団（家・氏族・部族）の守護神であつたこと等を知るのである。また、ラバン（アラム人）が同型の神をもつていたことから、我々は更にこうした現象が、ひとりイスラエル人に特有のものでなく、恐らく古代セム族遊牧民の間に屢々見られた現象でなかつたかと考える。

さて、それでは、こうした族長の名と結びついてあらわれてくる神々は、本来いかなる神であつたであろうか。

こうした問に対して、A・アルトが明確な解答を与えた。[五] 我々が前述の伝承から予想したように、アルトは、ナバテア碑文等と、族長伝承とを比較検討することから、こうした神々が *θεοὶ πατρῷοι* として

古代セム族の遊牧諸部族（氏族）の間に見出される明瞭な宗教史的タイプに属することを明らかにしたのである。即ち、こうした神々は、後世イスラエル諸部族を構成するに至つた諸氏族が、土地取得以前、沃地文化地帯周辺の草原地帯を遊牧していた時、族長に顕現し、族長と人格的、契約的関係を結び、その氏族の守護神となり、その子孫から、かゝるものとして族長の名と結びつけられて崇拝された神々に外ならなかつたのである。従つて、族長はこうした神の啓示受容者であり、礼拝の創始者に外ならなかつた。[六]今日の伝承において系譜的に述べられているアブラハム、イサク、ヤコブは、本来相互に関係のない、夫々異なる神の啓示受容者であり、礼拝創始者であつた。恐らく、後世、イスラエルを構成するに至つた諸要素は、カナン侵入後も夫々こうした固有の神礼拝を行い、その礼拝伝承をもつていたことと思われる。[七]彼等は、カナンの諸聖所と結びつくことによつて、己が固有の礼拝伝承と、当該聖所の聖所伝説とを融合させることになつたと考えられる。今日の伝承の伝える「アブラハムの神」は、その始め、こうした要素の成員から、アブラハムという歴史的人物の名のもとで崇拝され、その礼拝要素が新移住地の聖所に移し植えられ、その礼拝が死滅した後、連合神ヤハウェを指すものとして、ヤハウェ礼拝においても使用されることになつた名称でないかと思われる。そして、それと同時に、この礼拝のうちに伝承されていたアブラハムの人物像も長く記憶にとどまることになつたのではないかと考えられるのである。[八]今日の伝承において、イサクはベエルシバの聖所、アブラハムは、マムレの聖所、ヤコブは「ヨセフの家」[九]の定住するに至つた地域の諸聖所と結びつけられているのであるが、我々は、以上の考察から、こうした聖所伝説とヤハウェ信仰との結合は、古代イスラエルの礼拝史において比較的後期に行われたと考える。[一〇]

このように見てくる時、我々は、明らかに次のように言うことが出来るであろう。即ち、シケムの連合会議において、ヨシュアによつて、各部族の代表者達に対して捨てることを迫られた「先祖の神々」とは、まさしくこうした族長の名と結びついて各部族内で崇拝されていた神々のことではなかつたかと。

(一)(二) Cf. J. Skinner, A Critical and Exegetical Commentary on Genesis, (I. C. C.) 1956, P. 402.

(三) 例えば、マソラテキストの「彼等の父の神」の彼等は、ヤコブとラバンを指すと考えられるから、ラバンがいつたとすれば不自然である。また複数の主語を単数の述語で受けるのは文法的に不自然である。

(四) Cf. A. Alt, Der Gott der Väter (1929), Kleine Schriften zur Geschichte volkes Israel, Erster Band, 1959, SS. 16 f.

(五) Ibid, SS. 1-78. Cf. M. Noth, Geschichte Israels, S. 116. W. F. Albright, op. cit., PP. 242, 248.

(六) Cf. A. Alt, op. cit, S. 47.

(七) イスラエル諸部族内で多くの族長が伝承されていたことと思われる。今日の伝承において、ただアブラハム、イサク、ヤコブのみが伝えられているのは「モーセ五書」の形成が特殊な経過を辿つて行なわれたことによるものであろう。cf. M. Noth, op. cit, S. 118.

(八) Cf. A. Alt, op. cit, S. 48.

(九) Cf. ibid., SS. 52 ff.

(一〇) Cf. G. V. Rad, Gesammelte Studien Zum Alten Testament, (Das formgeschichtliche Problem des Hexateuch, 1938) 1958, S. 65.

* この伝承は、聖所伝説、礼拝伝承（三頁参照）に関する物語ではない。従つて、この伝承は古い時代の記憶をとどめているものであろう。

さて、次に我々はこうした古代セム族遊牧民の間に見出される明瞭な宗教史タイプに属する部族（氏族）神礼拝の性格を尋ねなくてはならない。

イスラエル初期の人名のうち、既述のように 'el という神名を含んでいる名前が多く見出されるのであるが、この 'el と並んで[一]'amm… people, family. 'ab…father. 'aḥ…brother, 'am…people. の要素を含む名前が数多く見出される。例えば、Abiram, Ahiram, Eliab, Abimelech, Ahimelech, Abiezer, Ahiezer, Abinoam, Ahinoam,

Ammiel, Ammihur, Ammishaddayi, Rehoboam[1] 等々である。こうした 'el, 'amm, 'ab, 'aḫ, 'am の要素を含む人名は、イスラエル人においては、紀元前十世紀頃まで多く見出される。[2] しかしそれ以後は、急激にへっている。こうした人名は、いずれも一つの文章を形づくつており、また 'amm, 'ab, 'aḫ, 'am の要素は、容易に神の名と交代し得るのである。例えば Abiram…My (Divine) Father is Exalted. Ahiram…My (Divine) Brother is Exalted. Abiezer…My (Divine) Father is a Help (to me). Ahiezer…My (Divine) Brother is a Help (to me). Eliab…My God is a Father to me. Abimelech…My (Divine) Father is (my) king. Ahimelech…My (Divine) Brother is (my) king. Ammiel … (The God of) my People is God (to me)[3] Rehoboam…Let (my People be) Widened.[4] 等々である。これは、個人の名が、誕生に際して、両親、または、誕生に重要な役割をもつた人間の発言を、そのまゝ固有名詞とする古代セム族の慣習によるものであろう。[5] 旧約聖書にもこうした事例が見出される。

(cf. Gen. 29 : 31 ff. 30 : 6, 8, 10, 13, 32 : 28, 1 Sam. 4 : 19 f.)

我々は、こうした人名の特徴から、当時のイスラエル諸部族とその部族神との強固な紐帯を読み取ることが出来る。家父長的な、また強固な連帯意識のもとで維持されている部族制度にあつて、父、兄弟、血縁者は、いずれも重要な意味をもつていた。こうした要素が、神と容易に交代し得るということは、部族神のその部族における地位を如実に物語つているように思われる。即ち、部族神は、その成員から、かゝる者として遇せられたのではないかと考えられる。事実、未だ定住生活に移行しない、成員間の連帯の甚だ強固なセム族遊牧民にあつて、神は、人間的に考えられ、成員から文字通りの意味で、父、兄弟、血縁者[6]と呼ばれたのである。従つて、成員は、文字通り神（家長）の子であり、兄弟であり、血縁者に外ならなかつた。[7] 神はこうした意味において、部族の支配者であり、指導者であり、また裁判官であつた。従つて、部族にとつて、父祖の名のもとに呼ばれた神のみが、彼等にとつて唯一の神であり、その他の神は考えられなかつたと言つてよいであろう。我々は、こゝに、こうした部族神礼拝が本来単一神教的傾向を持つていたことを知るのである。[8]

こうした事情は、イスラエル諸部族にあつても変りはなかつたであろう。上述の人名の示す特徴は、明瞭にこのことを物語つているように思われる。

さて、旧約諸文献からうかがい知れるように、イスラエル人は、その沃地文化地帯への移住、定着において、その地の古き、カナン人の地方的諸聖所と結びつき、そこで礼拝を行つたのであるが、我々は、彼等の捧げた礼拝が、少くともその初期においては、決して当該聖所固有の神に対してでなく、あくまでも己が部族神に対して行われたものであつたと考える。何故なら、上述のように部族の成員から礼拝を要求し得る正当な権利をもつ神は、部族神以外には考えられないからである。

さて、それでは、こうした神は、イスラエル人の沃地文化地帯への侵入に対して、いかなる役割を果したであろうか。

今日の族長伝承において、族長に顕現した神（勿論ヤハウェとなつている）は、族長に対して種々なる約束を与えている。[9] 即ち、祝福、子孫の繁栄、カナンの土地取得等々である。族長はこうした約束を信じ、それに基づいて行動したと述べられている。我々は、こうした伝承の原史料も、単なる後代の信仰の所産でなく、矢張り事実に基づくものと考える。何故なら、沃地文化地帯周辺に根拠地をもち、時宜的農耕を営み（cf. Gen. 26 : 12 ff.）、[10] 夏期牧草地帯を追つて、屢々文化地帯へ移動することによつて、文化地帯と接触していた半遊牧的牧人層にとつて、カナンの農耕地帯は、まさしく「乳と蜜の流れる土地 'eres

zābhath hālābh ʾădhebhāsh」(Ex. 4:17, Deut. 26:9, Num. 19:8)[一一三]に外ならず、こうした土地の占拠は、彼等の心からなる願望であつたと思われるからである。こうした土地取得、その地での子孫の繁栄の約束こそ、我々は、A・アルトと同じく、こうした型の神礼拝の根本的性格に属するものであつたと言うことが出来る。[一一四]今日の族長伝承は、既述のように、ヤハウェ礼拝のもとにおけるイスラエルの統一、イスラエル全体のカナンの土地取得の前史として編纂されたものである。しかし、我々は、こうした約束の記事は、決して、後代の創作でなく、あくまでも、事実に基づく[一一五]原史料—今日の伝承と比べて、はるかに直接的、単純な原史料—から構成されたと考えるのである。

(一)(五) Cf. W. F. Albright, op. cit, P. 244.
(二) Cf. J. Bright, op. cit., P. 89, N. 66.
(三) Cf. W. F. Albright, op. cit., PP. 244-245.
(四) Cf. J. Bright, op. cit., P. 90.
(六) Cf. W. F. Albright, op. cit., P. 245.
(七) 「古代の神々と、その礼拝者たちとの間の関係は、人間と人間との関係を示す言葉で表現せられたが、この言葉は、譬喩的な意味にはとられず、全く文字通りの意味にとられた。仮に、父が神であり、その礼拝者たちが子供であるといわれていた場合には、礼拝者は文字通りその神の子孫であり、彼等は一の自然的家族をかたちづくつて、相互に家族的責任を負つているという事を意味したのである。」セム族の宗教・前編、R・スミス著、永橋卓訳、岩波書店、昭和十七年、五二頁参照。
(八) Pahad Yishaq の Pahad (kinsman) は、このような意味で、イサクに顕現した神をその子孫が、イサクの血縁者と読んだのであろう。(本論文五頁註(一)参照)
(九) Cf. Die Nichtchristlichen Religionen, verf. und hersg. v. H. Glasenapp, Fischer Bücherei, 1959, SS. 46 f.
(一〇) Cf. M. Noth, Die Welt des Alten Testament, 3. Auflage, 1957, SS. 223 f.
(一一) 創世記一二・一—三(子孫、祝福)、一二・七(土地取得)、一三・一四—一六(土地取得、子孫)、一五・五(子孫)、一五・七(土地取得)、一七・四—八(子孫、土地、新しい神との関係)、一八・一〇(子孫)二二・一七(子孫、祝福)二四・七(土地)、二六・三(土地)二八・三以下(子孫・土地)、二八・一三—一五(土地、子孫、祝福)、三一・一三(祝福、子孫)、三五・九—一二(子孫、土地)、四六・三(子孫)、四八・四(土地、子孫)四八・一六(祝福、子孫)、五〇・二四(土地)
(一二) 時宜的農耕が、半遊牧的牧人層によつて行なわれていたことは、政治的理由でアモリ人の族長のもとに亡命したエジプトの高官 Sinuhe の記録 (Ca. 1900 B.C.) からも明らかである。これによると、アモリ人(東部シリア…Kedem)は、時宜的農耕をまじえた半遊牧的生活をしていたようである。cf. Westminster Historical Atlas to the Bible, P. 25.
(一三) Cf. M. Noth, Geschichte Israels, S. 23. M. Weber, op. cit, S. 13.
(一四) Cf. A. Alt, op. cit., S. 66.
(一五) Cf. G. v. Rad, op. cit, (Verheissenes Land und Jahwes Land im Hexateuch, 1943) S. 90.

以上我々は、イスラエルが本来見知らぬ神であつたヤハウェに対する一二部族の礼拝団体として成立したことに注目し、諸部族が連合成立以前にもつていた宗教を検討して来た。こうした宗教を我々は、宗教史学的観点から部族神礼拝として類型化することが出来るであろう。各部族がこうした己が固有の神礼拝によつて連合成立後も尚拘束されていたことは、既述のサムエル上・二〇・六(二頁参照)の個所からも推測出来るのである。

しかし、今日の旧約諸伝承においては、こうした部族神礼拝は、ヤハウェ信仰の背後にその姿を消し去り、ただ僅かにその痕跡を認め得るに過ぎない。我々はこうした今日の旧約のあり方から、部族神礼拝がヤハウェ礼拝によつて完全に克服されたことを知るのである。さて、それでは、ヤハウェ礼拝は部族神礼拝を如何に克服していつたであろうか。

今日の旧約文献は、こうした問に対して、何等答えない。従つて我々は、その克服の経過等について具体的に何も知ることが出来ない。勿論、前述のヨシュア記二四章の記事 (V. 15) にあるように、ヨシュアに属する部族—中央パレスティナの連合の中心聖所附近の住民—等は、早くからヤハウェに対する信仰告白をし、その礼拝を行つてい

たと思われる。しかし、前述のような、閉鎖的に独立した生活を行い、その生活様式を異にした各部族の成員間にヤハウェ信仰がゆき渡るまでには長年月を必要としたことと思われる。

我々は、こゝで各部族の参加した、大祭を伴う、恐らくその都度契約更新を意味した—規則的に繰返し開かれた[二]—連合会議をとりあげ、この問題を考察して見よう。

この連合会議が、各自閉鎖的生活を行つていた一二部族にとつて、結合を実現する唯一の機会であり、部族連合のあり方から見て、連合生活の最高の時であつたことは、間違いない。恐らく、こゝでは、ヨシュア記二四章の伝えるように、各部族の代表者たちに、ヤハウェを連合神として受容するに至つた重要な契機である先祖の受けたエジプト脱出時の神の偉大な救済と恩寵、及びこの神の絶大な権威とが繰返し述べられ、(cf. EX. 20:2, Num. 23:22-24:8, Deut. 26:5-9, Jud. 6:13, 1 Sam. 4:8, 2 Sam. 7:23 etc.) シナイの契約関係締結の伝承に基づく神の意志—神の律法が読まれ (cf. Deut. 31:10 f.)[三] 各部族の代表者達のそれに対する遵守の誓約がなされたものと推測される。また同時に、この連合会議は、各部族の成員にとつて大祭の開かれる最もよろこばしき時でもあつた。契約団体として成立したイスラエル人の同胞意識が、こうした大祭に犠牲をともなつて集つた各部族からの巡礼者 (1 Sam. 1:3 ff.) の接触を通して、醸成強化されていつたことも同様疑うことが出来ない。

このように、連合神ヤハウェに対する礼拝の重要性が、年毎に繰返し開かれた連合会議を通して、各部族の成員にまで次第に浸透して行つたと考えられる。我々は、旧約文献から (1 Sam. 9:12 f., 16:5) 士師時代の終り頃において、連合神ヤハウェの中心聖所—「聖なる櫃」の安置された—シロ以外の部族の地方聖所で、ヤハウェ礼拝が行われ、そこの住民がヤハウェに供物を捧げたことを知る。しかし、何時、どういう経過を辿つて、こうした地方聖所までヤハウェ礼拝が行きわたつたかは、今日の旧約文献のあり方から見てもはや明確になし得ない。

以上の考察から、我々は、こうした年毎に繰返された連合会議がヤハウェ礼拝の拡大と強勢に重要な機縁となつたと考える。こうした機縁を通して、一方ではヤハウェ礼拝が、次第に部族神礼拝を克服し、他方では、それに応じて、本来各部族に別個に伝承されていたカナンの土地取得の諸伝承が、その独立性を失い、「ヤハウェ礼拝のもとにおけるイスラエル全体の歴史」を構成する一部として、「モーセ五書」の歴史伝承のうちにその位置を占めるようになつていつたのではないかと考える。

さて、それでは部族神を克服することによつてヤハウェ礼拝はどのような発展をとげることになつたであろうか。

我々は、ヤハウェ礼拝がイスラエル諸部族の成員間に浸透して行く過程において、それまで各部族内で行われていた部族神礼拝から多くの要素を己が内に採用することになつたと考える。今、旧約文献から本来こうした部族神礼拝に属すると思われるもののうち、特にヤハウェ宗教において重要な位置を占めることになつたと考えられるものを考察し、一応この項を終えようと思う。

其の一は、今日の「モーセ五書」の物語において強調されているヤハウェのイスラエル人に対するカナンの土地取得とその地での子孫の繁栄の約束である。後世のイスラエル人は、彼等のカナンの土地取得をこの約束の成就と見、彼等のこの神に対する信仰告白の内容ともなつたものである。しかし、この土地取得と子孫の繁栄の約束が、本来部族神礼拝の固有の性格に属するものであつたことは、既に述べたところである。(九頁参照) また各部族内で夫々己が独自の土地取得の伝承が保存されていたと考えられることも既に述べた。(三頁註

(七)参照) 我々は、今日の旧約の伝えるヤハウェによる約束は、部族神礼拝に属し、各部族に夫々伝承されていた約束が、ヤハウェ礼拝の拡大と共に、この礼拝内容としてとり入れられ、その結果連合神ヤハウェのイスラエル全体に対する約束として受取られることになつたと考える。

其の二として宗教的連帯意識をあげることが出来るであろう。

連合神ヤハウェに対するイスラエル人の連帯意識が単に同時代の成員間に止まらず、父祖と子孫の関係に迄及ぶことは、エゼキエル書一八・二の「父たちが酢いぶどうを食べたので子供達の歯がうく」という言葉によつて明瞭である。また、このエゼキエル書の言葉からも明らかなように、この宗教的連帯意識は、イスラエルの歴史を通して存在し、イスラエル人の行動を規定したものであつた。祖先の罪が子孫に迄及ぶというこうした連帯責任の思想は、捕囚期前のイスラエル人の政治的危機において、レビ人祭司のこの思想を除去せんとする努力にも拘らず根強く残り、予言者によつて神義論の問題を提出せしめるに至つたものである。[三] このように、この思想はヤハウェ宗教の発展に対して重大な役割を果したものと言うことが出来る。

我々は、こうした宗教的連帯意識の源泉を部族宗教のうちに見出すことが出来る。既述のように(八頁参照)部族神と部族成員との紐帯は、甚だ緊密である。部族神と部族の成員との関係は、文字通りの意味で父、兄弟、血縁者であつた。成員間の連帯責任制は、こうした関係にある部族神によつて監視されていたのである。

連合成立後、ヤハウェ礼拝の部族内部への拡大によつて、こうした連帯責任制が、今やヤハウェに対するイスラエル人全体の連帯責任制となつて、この宗教のうちに生き続けることになつたと考えられる。ヤハウェは、イスラエル人にとつて、部族神のような、父、兄弟、血縁者の関係にあるものでなかつた。この神は、イスラエル人から隔絶した神であつた。この神との契約締結という事態は、連合神に対するイスラエル人の連帯意識を一層尖鋭にして行くことになつたのではないかと考えられる。

(一) 連合会議は年毎に開かれたと思われる。前掲、イスラエル宗教連合三二頁註(一)参照。

(二) 七年の終り毎に律法を読み聞かせなければならないという個所は、勿論申命記学派の労作であり、律法は、申命記律法を、聖所は、エルサレムを指していると思われる。しかし、「七年毎に律法を読む」ということは、古き慣例を受け継いでいるのではないかと考えられる。cf. M. Noth, op. cit, S. 97.

(三) Cf. M. Weber, op. cit, SS. 222-233.

三

以上の論述において、我々は旧約文献にその根跡を残すイスラエル諸部族の部族(氏族)神礼拝が何であつたかを問い、ヤハウェ礼拝との関係を考察して来た。部族(氏族)神礼拝は、イスラエルを構成するに至つた諸要素が、その半遊牧的生活を送つていた時に獲得し、彼等のカナンの地への侵入とともにこの地にもたらしたものであつた。この点連合神ヤハウェ礼拝も同じであつた。この神も旧約文献の伝えるように決してカナンの地の神ではなかつた。

さて、さきにふれたように(一頁註(三)参照)イスラエル人のカナンの土地取得(Ca. 1250-1225 B. C.)以前既にこの地方は、それ自身の長期に亘る歴史をもち、文化も高度に発達していた。イスラエル人の定住当時、この地方は、城壁、望楼、空濠等の防禦設備をもつ都市国家群[一]によつて占められていた。単純素朴な文化の所有者であつたイスラエル人が、こうした文化から決定的な影響を受けたことは、今日の考古学の成果からも容易に推測出来るところである。[二]

カナンの文化は、一口に言つて沃地農耕文化であつた。半遊牧的牧

人層に属したイスラエル諸部族が、定住生活の開始後、間もなく定着した地域によつて程度の差はあれ、次第に農耕生活、更に都市生活へと移行していつたことも旧約文献から見て明らかである。(三) こうしたカナン地方での定着生活、カナン人との接触は、彼等の生活様式の変化を促すと同時に、その宗教にも決定的な影響を及ぼさずにはおかなかつた。即ち、バール礼拝等、沃地農耕神礼拝との接触、混合である。(四)

（一）Medīn Habu のラメセス三世の神殿の壁画にあるシリアの Turnip 市の攻防の図は、当時のカナンの都市の防禦の状態を示していると考えられる。cf. The Westminster Historical Atlas to the Bible, P. 33. 旧約の歴史伝承は、イスラエル一二部族が、ヨシュアの指揮のもとにカナンに侵入し、カナンの諸都市を征服したことを伝えている。しかし、我々は、彼等の侵入は、人口稀薄な東ヨルダン及び西ヨルダンの山岳地帯からはじまり、徐々に平地に拡がつていつたと考える。cf. M. Noth, op. cit, S. 67. 彼等の有する貧弱な武力では、カナンの戦車を有する城壁都市を攻略することは困難であつた。Dor, Megiddo, Beth-Shan, Gezer 等の城壁都市は、士師時代を通してカナン人の住む所であり、(Judg. 1:27 f.) また、ユダ部族は、谷の住民を逐い出すことができなかつた。cf. The Westminster Historical Atlas to the Bible. P. 34.

（二）例えば、イスラエルの居住した町から出土した皿、壺、食事用の器具、武器、宝石は、カナン人のそれを模倣したものである。ラス・シャムラ文書の文字は、ヘブル語と同系であり、旧約の詩の形式のうち、ここから由来するものもあると考えられる。(cf. Judg. Ch. 5, 2Sam. 1:19 ff., Ps. 29:68 etc.) cf. ibid, PP. 30. 33 f. M. Noth, op. cit., SS. 44, 96. J. Finegan, op. cit., PP. 146 ff.

（三）Cf. A. Lods. op. cit., PP. 387 f.

（四）カナン人の間では、古くから穀物、果樹の豊穣をもたらす母神（Astarte, Aschera, Anat）植物の生長、枯死、再生をあらわす若い神（Tammuz, Attis, Eschmun, Adonis)、植物神 Dagon (1 Sam. 5:2) 等の礼拝と並んで天のバール、地方的聖所に住居する多様な姿をとるバール礼拝が行なわれていた。Ba'al は、本来固有名詞でなく、大地、地下の国を支配し、種々なる機能を営み、ある一定の山、泉、土地等々に住居する神々を Ba'al（所有者）と呼んだものと思われる。また、ラス・シャムラ文書の示すように、カナン人は、父・エルを主神とする壮大なパンテオンをもつていたのであるが、この主神は名目上に止まり、カナン人の生活において主動的役割を果したのはバールであつた。このバールもまた生命と生産の神であり、感覚的な生活領域を支配する神であつた。
cf. Die Nichtchristlichen Religionen, S. 46. W. O. E. Oesterey and T. H. Robinson, op. cit., PP. 57 f. M. Noth, op. cit, S. 133. J. Bright, op. cit., P. 108.

さて、それでは、ヤハウェ礼拝と沃地農耕神との接触、混合はどのようにして行われたであろうか。

イスラエル諸部族のカナン侵入は、宗教的には、第一に彼等の神の支配する草原地帯、沙漠地帯を去つて他の神々の支配する領域に入つたことを意味した。彼等の礼拝を捧げた場所は、ことごとく古くから当該住民によつて礼拝が行われていたカナン人の聖所であつた。(一) 我々は、既述のように（八頁参照）イスラエル人が、カナンの聖所でたとえ己が固有の部族神礼拝を行つたとしても、その聖所伝来の神々に敵対し、その礼拝を拒否したと考えることは出来ない。こうしたことは、古代の宗教観念から見て不可能であつたと思われる。何故なら、新移住者が、既にその地を支配している見えざる諸力に敵対することは、その復讐を招く危険を冒すことに外ならなかつたからである。(二) こうした観念は、連合成立後においても変りがなかつた。(三) 従つて、当然イスラエル諸部族のカナン定着時においては、彼等の固有の神礼拝と、その地在来の神礼拝とが同一聖所で共に行われることになつたと考えられる。しかも、こうしたカナン人の諸聖所は、巡礼聖地でもあつた。大祭の開かれる時は、諸地方から多くの巡礼者が集まり、歳の大市が開かれたのである。こうした巡礼者、市場に集まる人々は、その聖所の神に捧げる古き伝統的な儀礼に参与したと思われる。(cf. Deut. 33:19) こうしたカナン人の生活の律動に対して、定住生活に入つたイスラエル人も無縁であり得なかつた。彼等は、時の経過と共に次第にこうした聖所の伝える古き礼拝観念に入らざるを得なかつた。(四) こうした事態は、連合神ヤハウェの受容以後においても変りがな

かつたと思われる。(五)

(一) シケム、ベテル等は、古きカナンの巡礼聖地であつた。申命記三三章一九節のタボル山の神は、本来ヤハウェではない。地方神エルの聖所がここにあつたと思われる。カルメル山（1 kön. 18:19）の聖所も同様であつたと考えられる。その他のオフラの囲の地等の場合でも—はつきり述べられてはいないが—この場所が泉、テレビンの木、かしの木を含んでいたことから推測できる。何故なら、こうした聖泉、聖樹は、カナン人にとつても神聖な場所に外ならなかつたからである。 cf. G. V. Rad, op. cit., SS. 30 f. A. Lods. op. cit., P. 406.

(二)(三) M. Weber, op. cit., S. 143.

(四)(五) G. V. Rad, Thelogie des Alten Testaments, Band 1, SS. 28 f. ラートは、こうしたカナン人の生活の律動、聖所の伝える観念の世界に入つたイスラエル人が、自然に己が固有の神の啓示受容者、礼拝創始者—例えば、アブラハム、イサク、ヤコブ—達を当該聖所の聖所伝説と結びつけることになつたのであろうと考えている。

以上のように、イスラエル諸部族のカナンの生活は、第一に、ヤハウェ礼拝と沃地農耕神（特にバール）礼拝との共存を余儀なくさせたのであるが、更に第二に、イスラエル諸部族の農耕生活への移行は、彼等をして、必然的にバール礼拝の採用を促すことになつた。

既述のように（八頁参照）時宜的農耕を営み、文化地帯と屢々接触していた半遊牧的牧人層に属したイスラエル諸部族の農耕生活への移行は、その定住生活の開始とともに可成り流動的に行われたと思われる。(一) また、農耕生活に入るにあたつて、彼等が多くの農耕技術を先住民であるカナン人から学ばねばならなかつたことも当然のことと考えられる。こうした事態は、彼等の宗教生活をも決定的に規定することになつたのである。何故なら古代農耕民族において、彼等の伝統的農耕技術は、神的啓示の結果得られたものに外ならず、彼等にとつて、農耕地は神聖なる大地であり、地力を呼び起すことは、神聖な行事であり、決して俗事ではなかつたからである。穀物、果樹の生育は、土地の支配者であり、生命と生産の神であるバールの神秘的な力によるものであつた。大地は、バールの下す雨の種子によつて懐胎する。即ち、植物の発芽は神聖な結婚（ἱερὸς γαμός）の結果であつた。従つて、大地を呼びさまし、その力を利用することは、冒険的な行為であり、大地の祝福を得る為には正しい儀礼を通して神から授けられた方法によらねばならなかつた。古代農耕民にとつて、彼等の伝統的な農耕技術は、文字通り神的啓示に外ならなかつたのである。(二) バール、アシュタルト、ダゴン、アナト等の神々は、いずれもこうした農耕神であつた。一方、イスラエルの神ヤハウェは、沙漠の神であり、本来上述のようなカナンの神々のもつ性格をもつものでなかつた。この神は、パレスティナに宮居する土地神でもなく、地方神でもなく、また機能神でもなかつた。ヤハウェ礼拝は、農耕定住生活の新事態がもたらした問—穀物の播種、オリーブ、ぶどうの栽培、豊穣なる収穫—に対して答える何ものももたなかつたのである。(三) 従つて、イスラエルの農民の日常生活にとつて連合神ヤハウェは、むしろ無縁の神であり、農耕神こそ彼等の切実な願をみたす神であつたと言える。

以上の考察から、我々は、農耕生活に入つたイスラエル人が、何故必然的にバール礼拝を採用しなければならなかつたかを知ることが出来る。

(一) M・ウェーバーは、半遊牧的小家畜飼育層の定住生活及び都市定住生活への移行をこの層の一般的傾向と見ている。 cf. M. Weber, op. cit., SS. 46 f.

(二) こうした農耕神礼拝に神殿売淫制度が属することは明らかであろう。qedhēshāh (Deut. 23:18) qedhēshīm (1 kön. 15:12, 2 kön. 23:7) は、聖所で生活する売春婦・男娼を指していると思われる。また、礼拝対象である maṣṣēbā (Gen. 28:18, EX. 23:24, Deut. 16:22) 'ashērā (Jud. 6:25, Deut. 16:21) は本来男根を表象したものと思われる。cf. G. V. Rad, op. cit., SS. 31, 34. シャントピー・ド・ラ・ソーセイ、篠田一人訳、宗教史大系一、新教出版社、昭和二十年六八頁参照。M. Noth, Geschichte Israels, S. 133.

(三) Cf. W. O. E. Oesterley and T. H. Robinson, op. cit., PP. 191 f.

さて、ヤハウェ礼拝は、こうした新事態の出現に対して、どのように推移していつたであろうか。

我々は、旧約文献からうかがえるように、連合の初期には連合の守護神としてヤハウェが、豊かな収穫をもたらす神としてバールが、夫々崇拝されていたように思われる。(一)上述のように、イスラエル連合にとつてヤハウェは決してパレスティナに宮居する神ではなかつた。デボラの歌（Ca. 1100 B. C.）(二)が明瞭にあらわしているように、この神の本拠は、南方沙漠地帯の山岳（セイル、シナイ）にあり、イスラエルの困窮に際して、イスラエル人の祈願によつて救済のために、はるばるセイル山から出てエドムの地を通つて進撃してくる戦争神であつた。一方バールは、カナンの土地の支配者であり、多くの聖所の所有者（主）であり、農耕神であつた。ここから推測出来るように、イスラエル人は政治的、軍事的危機に際して連合神ヤハウェを、平和な繁栄の時には農耕神バールを崇拝したように思われる。(三)このことは、今日の士師記からも容易に読み取れるところである。

しかしこうした事態は、ヤハウェ礼拝が各部族内部まで浸透し、ヤハウェ礼拝を中心とするイスラエル人の統一意識の醸成強化と共に、更には、士師記に伝承されている隣接諸種族との角逐を通して次第に変化して来たと考えられる。何故なら、連合内でのバール礼拝は、この連合の存立を脅すことを意味したからに外ならない。(四)我々は、熱心なヤハウェ崇拝者—祭司、予言者、ナジル人—によつて次第にこの危機が意識され、イスラエル人にとつて神はヤハウェのみであり、礼拝はこの神のみに捧げられねばならないという思想が強化されていつたと考える。士師記において、イスラエル人の困窮が、すべてヤハウェを忘れてバールを崇拝したことに原因があると主張されていることから、こうした思想が連合の経過と共に進展していつたことを推測するのである。

（一）部族神礼拝がこれと並んで行なわれていたことは、当然である。しかし、この部族神礼拝を当面の考察から除外しても差つかえないであろう。

（二）H. W. Robinson, The Old Testament, London, 1949. P. 211.

（三）Cf. M. Weber, op. cit., SS. 165 ff.

（四）バール礼拝が、イスラエル農民の間に行きわたることは、ヤハウェ礼拝の存立を脅かすことになる。このことは、連合神ヤハウェに対する礼拝を中心とするこの宗教連合の危機を意味することに外ならない。

さて、それでは、こうした思想の強化は具体的にどのような方向を通つてあらわれたであろうか。

既述のように農民の日常生活にとつて重要な意義をもつものは、ヤハウェ礼拝ではなくバール礼拝であつた。従つて、ヤハウェ礼拝が、イスラエル人の唯一の礼拝対象となるためには、バールに代つて、ヤハウェが土地の支配者となり農耕民の願望に答え得るものを己が内にもたねばならない。それでは、アウトクトーンの意識を最後まで持ち得なかつたイスラエル人において、しかも本来沙漠の神であるヤハウェは、いかにして、こうした性格を己が内にとり込むことが出来たであろうか。

イスラエル人のパレスティナ定住生活において、彼等は既存のカナン人の聖所において己が固有の神礼拝を行い、当該聖所の伝説(Hieros Logos)を自己の族長と結びつけ、その聖所の神の啓示受容者、礼拝創始者を族長としたことは、既に述べたところである。（七頁参照）部族神礼拝が、ヤハウェ礼拝の背後にその姿を消し去つた後、これらの聖所で顕現した神は、ヤハウェとされることになつたのである。即ち、イスラエル人は、その定住するに至つた地の聖所で族長に顕現した神を連合神ヤハウェとすることによつて、その聖所が本来イスラエル人のものであることを主張しようとしたのではないかと考えられる。こうした動きは、ヤハウェの中心聖所—例えば、シケム、ベテル等—において早くから、ヤハウェ崇拝の地方的浸透と共に、夫々の地

方聖所において徐々に進展していつたと考えられる。

今、この間の事情を、創世記一二・六―七（J）の短い聖所伝承を検討することから明らかにして行きたい。

アブラムはその地を通つてシケムの所、モレのテレビンの木のもとに着いた。そのころカナンびとがその地にいた。時に主（ヤハウェ）はアブラムに現われていわれた。「わたしはあなたの子孫にこの地を与えます。」アブラムは彼に現われた主のためにそこに祭壇を築いた。

この個所は、単純な形式のもとに、シケムの聖所―祭壇―の縁起について語つている。我々は、この伝承が在来のカナン人の聖所伝承の痕跡を全然含んでいないこと、また特別の説明、文飾などがほどこされていないことから、この伝承は、イスラエル人の聖所伝承に関する最も標準的な図式を端的に示していると考える。即ち、この図式において、イスラエル人の聖所に対する一般的な解釈、主張が明瞭に表現されていると考えるのである。イスラエル人が、この伝承において主張せんとした所は、「この地―当該聖所、及びその近傍の地―」は、本来ヤハウェより族長アブラハムを通してイスラエル人に―カナン人にではなく―授与された封土であるということであつたと考えられる。このことから逆に我々は、ヤハウェこそこの地の真の所有者であり、支配者であるという当時のイスラエル人の考え方が、この伝承の背後にひそんでいるのを読み取るのである。何故なら、その聖所の真の所有者である神からその地を与えられたものこそ―例えそこに先住民がいたとしても―その地を正当に所有し得るからである。(一)

さて、こうした単純な形式のもとに表現されているイスラエル人の解釈、主張は、彼等の居住するカナンの他の聖所にも妥当すると考えられる。このように、パレスティナの諸聖所は、彼等にとつて、いずれもヤハウェの所有地であり、彼等に対して与えられた封土に外ならないものとされるに至つたと思われる。こうした動きは、結局、カナンの全土はヤハウェのものであるという考えに迄発展するであろう。我々は、こうした結果を、「地は永代には売つてはならない。地はわたしのものだからである。」というレビ記二五・二三の記事から明瞭に読み取ることが出来るように思われる。

以上の考察から我々は、ヤハウェがパレスティナ全土を支配する神であるというイスラエル人の観念が、古くは部族神礼拝の性格に属する約束において準備され（九頁参照）部族神の消滅後、連合神ヤハウェ礼拝の拡大と共に除々に発展して行つたことを推測するのである。

さて、こうした経過は、その結果ヤハウェ礼拝に重大な帰結をもたらすことになつた。何故なら、ヤハウェ礼拝は、こうした経過と共に、それまでなかつた全く新しい要素を己が内にとり入れることになつたからである。即ち、第一に、連合神ヤハウェは、今や聖所の真の「主」として、それまでイスラエル農民によつて、専らバールに対して捧げられていた礼拝を己に対して行うよう要求する権利を持つことになつた。(二)更に、これと関連して、第二に、パレスティナを己が土地となしたヤハウェは、次第に地方神としての性格をもつことになり、もはや連合の保護神に止まらず、イスラエル人の農耕生活にも関与する神となつていつたのである。我々は、こうした事情を、本来バールにのみ属した農耕に必要な雨、農耕技術をヤハウェの属性としている申命記三二・二、イザヤ書二八・二三―二九等の記事から推測出来る。イスラエル農民が、それまで地方的聖所でバールに対して行つていた伝統的儀礼は、今や、連合神ヤハウェに対して捧げねばならないことになつたのである。

我々は、以上の考察から、ヤハウェ礼拝がカナンの諸聖所を積極的に自己の所有とし、その結果、それまでバール礼拝のみが独占していた農耕儀礼を順次己が内容としてとり入れることによつて、さきに掲げた第一の危機を克服して行つたと考える。そして、今日の旧約律法

に見出せる農耕に関する諸規定[11]の背後に、ヤハウェ崇拝者の可成り積極的な働きを見ることが出来るように思われる。

（一）Cf. C. A. Keller, Über einige alttestamentliche Heiligtumslegenden I, (Z. A. W., 67. 1955.) SS. 150 ff.

（二）後世、イスラエルの三大節となつた「hag hammāṣôth 種入れぬパンの祭」(EX. 23:15, 34:18)「hag haqqāṣîm 刈入れの祭」(EX. 23:16, 34:22, Deut. 16:9-11)「hag hā'āmiph 取入れの祭」(EX. 23:16, 34:22) は、カナンの農耕祭から由来するものである。(cf. Jud. 9:27) cf. W. O. E. Oesterley & T. H. Robinson, op. cit., PP. 165, 180 f, 198.

（三）例えば、レビ記一九・九の「畑のすみずみまでは刈りつくしてはならない」。一九・一〇の「(植樹の時) その実を三年間食べてはならない。」一九・二四の「四年目の実は聖なるもので、さんびの供物として主にささげなければならない」。その他二三・二二及び申命記二四・一九―二一等々の規定は、カナンの古き農耕儀礼に由来するものと思われる。これらの諸規定は、恐らく畠、果樹等にそのもち分を与え、かつ慰め、その歓心をかうという意味、ないし目的から出たものであろう。即ち、これらのものは、いずれもバールの超自然的な生命によつて充満しているものと考えられていた。今日の旧約の諸規定は、本来こうした農耕儀礼に属したものを変様した意味において（非神話化して）取り入れたものと考えられる。cf. M. Weber, op. cit., S. 166. A. Lods, op. cit., P. 402.

さて、以上のように、ヤハウェ礼拝は、バールのみが独占していた農耕儀礼を吸収することによつて、己が内容を豊かにし、連合神ヤハウェの権勢を増大したと考えられる。しかし、このことは同時にヤハウェ礼拝にとつて第二の危機となつた。何故なら農耕儀礼の採用は、必然的にバール礼拝との混合を結果することとなつたからである。

連合神ヤハウェが、イスラエル人にとつてカナンの諸聖所の「主」となつたということは、決して当該聖所からバールを駆逐したことではなかつた。従前通り、カナン人によつてバール礼拝が行われたことは変りがなかつた。また、早くからバール的観念の世界に入り、バール礼拝を行つていたイスラエル農民にとつて、バールは依然として崇拝の対象であつた。このことは、予言者ホセア（前八世紀）の言葉 (cf. Hos. 2 ch. 2)、またアハブ王の時代、カルメル山上において、民を前にして行われた予言者エリアとバール予言者の争の記事 (1 kön. 18:19 ff.) からも十分うかがえるところである。従つて、こうした事情のもとで、ヤハウェ礼拝が、本来バール礼拝に属した農耕儀礼を採用することは、当然両者の混合を将来することになつたと考えられる。このことは、ヤハウェ礼拝に重大な帰結をもたらすことになつた。以下、すこしく立入つて考察して行こう。

さて、イスラエル人の人名のうち、バールの名を含むものが士師時代の末期に多く見出される。こうした人名は、イスラエル人のカナン侵入以前には全く見出されないものである。（八頁参照）[12]特に、連合神ヤハウェに油ぬられて王となつたサウル、ダビデ、また熱心なヤハウェ崇拝者ヨナタンの息子にもこの名が見出される。即ち、Ishbaal, Beeliada, Meribaal (1 Ch. 8:33, 9:39, 14:7, 8:34) 等である。[13] サウル、ダビデ、ヨナタンは、いずれも熱心なヤハウェ崇拝者であり、神の意に叶つた人物として叙述されている。こうした人物が、自分の息子にバールの名をつけたと言うことは一体何を物語るものであろうか。

我々は、こうした人名の示す特徴から、当時のイスラエル人が、両者を夫々崇拝し、バールが「主（所有者）」と訳されるところから、この名をヤハウェに対する称号として使用していたのでないかと考える。いずれにしろ、両者は後世の予言者、申命記学派に見られるような排他的関係になかつたことは間違いないであろう。このことは更に後代に属す、エジプトで発見されたエレファンティネ・パピルス（前五世紀頃）からも推測される。当時、この地のユダヤ人が、ヤハウェをヤフという名で崇拝していたことを、このパピルスから知るのであ

るが、この外に更に、Eshem-bethel, Herem-bethel, Ashim-bethel, Anath-bethel 等々の名が、ヤフと共に見出される。Anath は、カナンの女神名であり、Ashim は、ハダド神の娘 Shime (cf. Amos. 8:14) を指していると考えられる。こゝから我々は、当時のユダヤ人が、ヤハウェの外に、こうした神々を実際に崇拝していたか、または、ヤハウェの本質的な姿の各面を「神の家の名」「神の家の神聖」「神の家の象徴」等という称号で表現したか、どちらかでないかと考えるのであるが、こうした事態は、上述の農耕神バールとヤハウェの共存の名残りを示すものではないかと推測される。(三)

我々は、こうした事態から、当時のイスラエル農民が一般に連合神ヤハウェと農耕神バールを混同し、区別することなく、ともに崇拝していたことを知るのである。このことは、元来、バール礼拝において礼拝対象であつた偶像が、本来如何なる偶像も持たなかつたヤハウェ礼拝に使用されたことからも推測される。(cf. I kön. 15:12, 13, etc. 二頁註(四)参照) 我々は、前述のようにイスラエル人のバールを含む人名が士師時代の末期に近づくにつれて多くなつて行くように思われるところから、こうした両礼拝の混合も、恐らくその頃一般に見られるようになつたのではないかと推測する。

さて、それではこうした事態は、ヤハウェ礼拝にとつて何を意味したであろうか。

イスラエル農民によつて、ヤハウェが農耕神バールのような意味で崇拝されるということは、明らかにヤハウェ礼拝のバール化を意味することになるであろう。このことは、ヤハウェ礼拝が己が内にバール礼拝からその要素を吸収し、己が内容を豊かにすることでなく、逆にバール礼拝の内に吸収されて了う危険にさらされたことを意味する。連合神ヤハウェは、繰返し述べたように決してカナンの神でなく、農耕神でもなく、性格を異にする沙漠の戦争神であり、本来近づくことを許さぬ聖なる神であり、しかもイスラエルと特殊な契約関係にある神であつた。(四) 従つてこうした神に対する礼拝が、その特質を失い、地方神としてバール化することは、終局において、恰も、ペリシテ人の神が先住民であるカナン人の神々（ダゴン、アシュタルト）の内に吸収されて消え失せた(五)と同じ運命を辿る危険性をもつことを意味した。そして、またこうした意味においてバール礼拝は、事実においてヤハウェ礼拝の存立を脅かすものをその本質として持つていたと言うことが出来る。我々は、更に、神殿売淫制度を考察することからこの点を検討して行こう。

(一) Cf. W. F. Albright, op. cit, PP. 285 f.
(二) Cf. A. Lods, op. cit, P. 408.
(三) Cf. ibid., PP. 404 f. J. Finegan, op. cit., P. 201.
(四) 上掲、イスラエル宗教連合、三七頁以下参照。
(五) A. Lods, op. cit., P. 408.

さて、農耕神礼拝に神殿売淫制度がつきものであつたことは、既に述べた所である。(一三頁註(一)参照) そして、神殿売淫制度が上述のような両礼拝の混合の結果、ヤハウェ礼拝に採用されることになつたことも特に怪しむに足りないであろう。(cf. I kön. 15:12, 2 kön. 23:7, Deut. 23:18, etc.) 王朝時代エルサレムの神殿でこの制度はヤハウェの名のもとで行われた。(一) また、こうした神殿売淫制度が、農耕儀礼から由来することも明らかである。

カナンの農耕民によつて、古くから崇拝された Tammuz-Adonis のような神々は、発芽、生育、枯死し、更に翌年再び発芽する植物の再生力を象徴する神々であつた。(二) 既述のように、穀物、果樹はバールと大地の神聖なる結婚によつて実り豊かな収穫をもたらすと信ぜられた。農耕民は、神殿売淫に参与することによつて、この神聖なる結婚に儀礼的に参与し、その神的生産力を促進し、増大させることが出来たのである。性、酒、舞踏を手段とするオルギーが、こうした儀礼に

属することは言うまでもない所である。こうしたオルギーは恍惚的状態を通して、神との神秘的な結合をもたらすものである。更に尚、こうした儀礼は、そのうちに呪術的な要素を含んでいた。神、神秘的な力をもつ存在は、こうした儀礼に拘束され、自己の務を果すことを余儀なくされたのである。

以上のように、神殿売淫制度が、その背後にこうした要素をもつていたとすれば、こうした制度を採用したヤハウェ礼拝も、必然、以上の要素―儀礼、観念―を持つことになつたと思われる。そしてまさしくこうした一連の要素こそバール礼拝の根本性格に属したものであつた。

以上のような考察から、我々は、こうしたバール礼拝の本質的性格が、ヤハウェ礼拝の存立を根底から脅かすものであつたことを知るのである。何故なら、若し、こうしたバールの性格が、ヤハウェ礼拝の[三]内で徹底されたとするならば、第一に、契約神として、人格的な性格をもつヤハウェは、自然の生命と区別出来ないような自然神に堕して了うであろう。第二に、イスラエル人から隔絶し、絶大な権威と力をもつ[四]連合神ヤハウェも呪術的に強制し得る神となる。またオルギーによつてこの神と内的交わりも可能となる。第三に、シナイの伝承に見られるような、特殊な契約関係締結に基づくこの神とイスラエル人との人格的、倫理的紐帯は、地方神とその住民の関係に移されることになるであろう。

以上の簡単な考察からも、我々は、バール礼拝との混合が、いかに重大なる危機をもたらしたかを知ることが出来る。

さて、それでは、こうした事態において、ヤハウェ礼拝はいかに推移したであろうか。

我々は、ヤハウェ崇拝者（祭司、予言者、等）が、バール礼拝の混合とともに、次第に両者の性格の相違、危険性を意識して来たことを疑うことが出来ない。彼等は、先ず、カナンの神々の礼拝とヤハウェ礼拝の一致せざる点を意識し、そうした点を除去しようとしたと思われる。我々は、旧約律法の諸規定のうちから、彼等のこうした働きを見ることが出来るように思われる。例えば、レビ記一一章、申命記一四章の汚れた動物として食すことを禁ぜられているもののうち、豚は、ラス・シャムラ文書では、アリヤン・バールと特別な関係にあり、またサイプラス島のアフロディテの礼拝においてもある役割を果したのである。恐らく、こうした一連の規定は、祭司層の長期に亘る努力から形成されたものであろう。[五]また、出エジプト記二三・一九、三四・二六の「あなたは子やぎを、その母の乳で煮てはならない」は、ラス・シャムラ文書から、乳を使つて行う呪術を防ぐことであることがわかつた。[六]祭司が、ぶどう酒、または、醱酵させた飲料を祭式の前に飲むことを禁ぜられたこと。(Lev. 10:9) モレクに子供をさゝげることの禁止 (Lev. 20:2) 等は、バール礼拝のもつ、性、酒によるオルギーの除去を意味するものと思われる。[七]

以上のように、まずヤハウェ礼拝とバール礼拝の相違が意識され、そうしたものの除去が、ヤハウェの意志として次第に律法のうちにとり入れられて行つたと思われる。しかし、宗教連合の時代には、後代の記述予言者、申命記学派に見られるような、バール礼拝に対する激しい組織的、原理的な闘争は行われなかつたように思われる。こうした闘争は、イスラエル連合自体が、それ自身と全く質を異にする政治団体へと発展した時から始まつたように思われる。そして、またヤハウェ礼拝の内的発展も、一二部族連合が、王国へと発展することによつて、この連合の独自の性格が明瞭に自覚されて行くとともに深化して行くことになつたと考えられるのである。

（一）Cf. M. Weber, op. cit, S. 202.

（二）士師記一一章のエフタの娘の死に関する伝説は古くから年毎に行なわれ

ていた植物神（女神）の死を歎く儀礼から由来したものと考えられる。cf. ibid., S. 159.

(三) 前掲、イスラエル宗教連合三八頁以下参照。

(四) 同四〇頁参照。

(五) G. V. Rad, op. cit., SS. 35 f.

(六) Ibid., S. 36.

(七) Cf. M. Weber, op. cit., S. 203.